

国際日本学学生ワークショップ における日本語授業

田中香織（ヤギェロン大学）
inae_kaori@yahoo.co.jp

【要約】

本稿は2009年から毎年ポーランドで4月、または5月に開催されている「国際日本学学生ワークショップ」における日本語授業について、コーディネーターを務めた過去二年間の内容をまとめ、参加者を対象にしたアンケート回答より授業の意義を問い直し、今後役に立てようとするものである。コーディネーターとして代表でまとめさせてもらうものの、本取り組み自体はポーランドの日本語教師を中心に毎年約20名の講師による共同実践である。

1. はじめに

国際日本学学生ワークショップ¹は、ポーランドと近隣諸国の学生が集まって行う一週間弱の合宿で、2009年から毎年春に開催されている。教授・講師・大学院生による講義・研究発表と日本語授業、そして親睦の時間の三つが合宿の主な構成要素となっている。日本学の講義・研究発表の内容は論文集としてまとめられるため、大学院生をはじめとする若手研究者にとって経験を積む貴重な場でもある。また、年に一回大学の枠を越えた共同実践の機会を得られる日本語教師陣にとっても日頃得難い学びの場となっている。

2011年と2012年の過去二回の合宿において日本語授業のコーディネートを担当する際、合宿自体、学生が主体的に実施するものであるということで、前年のアンケート回答や大学で聞ける学生たちの意見を元にしながら、できるかぎり学生のニーズに合った授業を提供することを心がけてきた。その結果、合宿に期待される授業内容に関する気づきを得るとともに疑問も生じて来た。それは合宿の授業に望まれている内容として、文化的な知識や体験が得られるものがかなり多いということと、学生の意見に耳を傾けることによって変化してきた合宿における「日本語」授業とは、今後どうあるべきかということであった。本稿は学生のアンケート回答に照らし合わせて過去二回の合宿の授業内容を分類し、提供している授業と望まれている授業の現状を把握し、2013年以降の授業に役立てることを目的とする。また、近隣諸国では2009年からハンガリー日本語教師会による日本語キャンプが開催されているし、2012年にはバルカン半島日本語サマーキャンプも初開催されたが、今回のまとめが他国との情報交換のきっかけにもなればと考えている。

2. 国際日本学学生ワークショップの概要

瓜生他（2010）によると、2009年の第一回国際合宿が開催されることになったきっかけは、その一

1 国際日本学学生ワークショップが事業の正式名称であるが、通称国際合宿と呼ばれている。本稿中、「国際合宿」、「合宿」と記述した場合も、本国際日本学学生ワークショップを指すものとする。

年前にスロバキアのブラチスラバで開催された会議、Enhancing Mutual Exchange Between Japan and Central European Countries (The Sasakawa Central Europe Fund) だった。ここで顔を合わせたハンガリー、チェコ、スロバキア、ポーランドの日本学研究者の間で、学問的興味を共有する学生にも交流の場を提供し、情報交換と刺激を与え合う機会を作ろうということになり、一年後にヤギェロン大学の教師が中心になって本合宿が始まったということである。

当初教師たちの意見では、このような大きなイベントはせめて一年おきの開催が妥当とされたが、学生たちから毎年の開催を望む声が高かったため、学生たち自身で実施するならば教師たちは協力するという条件で、二年目からは学生が実行委員を務めることになったということから関わっている教師、学生より聞いている。毎年、国際交流基金や実施校等から資金面の援助を受けて実施されているが、これらの申請や報告も全て実行委員となった学生がその責任を果たしている。

表1に見られるとおり、参加人数は年によって異なるが、150名から200名が参加する大イベントである。参加者の大部分を占めるのは2011年まではポーランドで日本学を専攻する国立3大学（アダム・ミツケヴィチ大学、ニコラウス・コペルニクス大学、ヤギェロン大学）の学生だったが、2012年はワルシャワ大学の学生も加わり、ポーランドの日本学科の学生間のネットワーク形成、交流に役立っている。国際合宿と唱ってはいるものの、ポーランド国外からの参加者数は限られている。これは、交通費や参加費の参加者自身による費用の負担が軽いことも一つの要因ではあるが、教師間の繋がりを利用した呼びかけが行われなかった2011年、2012年については実行委員の学生に他国への呼びかけのノウハウがなかったということが大きな原因であろう。

表1 国際日本学学生ワークショップ（過去4回の概要）

表中の略称：UJ（ヤギェロン大学）、UAM（アダムミツケヴィッチ大学）、UMK（ニコラウスコペルニクス大学）、UW（ワルシャワ大学）

開催年	2009年	2010年	2011年	2012年
開催期間	4月15日（水）～19日（日）	5月4日（火）～9日（日）	5月10日（火）～15日（日）	4月17日（火）～22日（日）
開催地	クラクフ（半日） ムルザシフレ（4泊）	クラクフ（1泊） ムルザシフレ（4泊）	ポズナン（2泊） ジェルクフ（3泊）	クラクフ（半日） ムルザシフレ（5泊）
実行委員	UJ 教員	UJ 学生	UAM 学生	UJ 学生
参加人数	166	162	126	211
参加人数の内訳				
学生	UAM 48 UJ 56 UMK 12 コメンスキー 12 カレル 7	UAM 30 UJ 48 UMK 14 UW 3 コメンスキー 12 カレル 11 ポッフム 6	UAM 38 UJ 40 UMK 23	UAM 56 UJ 49 UMK 29 UW 33 カレル 4 ウィーン 2
教員／講師	留学生 3 28	留学生 3 35	留学生 6 25	留学生 6 32
資金	国際交流基金ブダベスト日本文化センターローカルプロジェクトサポートプログラム	国際交流基金さくら中核事業	国際交流基金日本語普及活動助成自由企画事業	国際交流基金さくら中核事業
	各大学、他機関からの助成金 学生の参加費 1人300ズロチ（約7000円 2012年8月現在）			

注：学生の参加費には開催地までの交通費及び前泊等に必要経費は含まれない。教員も同様に開催地までの交通費は自己負担。教員／講師は部分的に参加した人数も数えた

表2は2012年に行われた合宿のスケジュールである。6日間の日程の初日には参加者がクラクフに集合し、開会式と基調講演、日本文化のワークショップを終えた後、バスで3時間ほどかかる山中の

合宿所へ移動した。表中の「日本語」が日本語授業に当たり、後の数字1から4は、それぞれ1年生、2年生、3年生、修士課程のレベルを表している。2012年の合宿では各レベルに5回の日本語セッション(①から⑤まで)と合同セッションが1回(日本語合同⑥)が行われた。次の「3. 国際合宿における日本語授業」で日本語授業の内容について詳しく述べることにする。

表2 2012年国際日本学学生ワークショップ スケジュール

4月 17日 (火)	9:00-13:15	クラフマンガセンター集合/開会式基調講演/日本文化ワークショップ			
	14:00-17:00	マンガセンター出発/ムルザシフレ着			
	17:15-18:00	オリエンテーション			
	18:00-19:00	夕食			
	19:00-	懇談会(ウィーン・ボズナンの発表)			
18日 (水)	9:00-9:45	朝食			
	10:00-11:30	日本語1-①	日本語2-①	日本語3-①	日本語4-①
	11:45-13:15	教授/講師陣による講義			
	13:30-14:30	修士課程学生/日本人留学生による発表			
	14:30-16:00	昼食/休憩			
	16:00-17:30	日本語1-②	日本語2-②	日本語3-②	日本語4-②
	18:00-19:00	夕食			
19:00-	懇談会(ワルシャワ・ブラハの発表)				
19日 (木)	9:00-9:45	朝食			
	10:00-11:30	日本語1-③	日本語2-③	日本語3-③	日本語4-③
	11:45-13:15	講師陣/博士課程学生による講義・発表			
	13:30-14:30	修士課程学生による発表			
	14:30-16:00	昼食/休憩			
	16:00-17:30	日本語1-④	日本語2-④	日本語3-④	日本語4-④
	18:00-19:00	夕食			
19:00-	懇談会(トルンの発表・Light Up Nipponのビデオ)				
20日 (金)	9:00-9:45	朝食			
	10:00-11:30	日本語1-⑤	日本語2-⑤	日本語3-⑤	日本語4-⑤
	11:45-13:15	講師陣/博士課程学生による講義・発表			
	13:30-14:30	博士課程学生による発表			
	14:30-16:00	昼食/休憩			
	16:00-17:30	日本語 合同 ⑥			
	18:00-19:00	夕食			
19:00-	懇談会(クラフの発表)				
21日 (土)	8:00-8:45	朝食			
	9:00-18:00	ハイキング(雨天のためバス旅行に変更)			
	18:00-19:00	夕食			
	19:00-	開会式/キャンプファイヤー			
22日 (日)	8:00-8:45	朝食			
	9:00-	ムルザシフレ出発 クラフへ			

3. 国際合宿における日本語授業

3-1. 教師の立場から考える合宿における日本語授業の意義

国際合宿の授業は国際合宿の授業らしいものであることが望ましい。学生にとって合宿の日本語授業にどのような意義があるかを教師の立場から考えてみると、1) 普段学べないことを学ぶ、2) 他校・他国の学生と日本語をツールに交流する、3) 刺激を受け、学習動機を高めて大学に戻る、といったことが挙げられる。特に普段日本語を使う環境にない中で、多くの学生が5年間日本語の学習を続けるヨーロッパでは、3つ目の学習動機を高めて各大学へ戻ることは非常に大切なことと言える。

また、ポーランド国内外から参加する教師にとっても合宿の授業は教師研修の絶好の機会でもあり、その意義は大きい。日本語授業を担当する教師は1ヶ月以上前から共同で授業を企画し、約20名のスタッフで教案や教材のアイデアをメーリングリストを通じて共有する。合宿中は1コマに複数名の教師やボランティアの留学生が入り、授業を実施するため、互いに授業見学をし合う機会ともなっている。更に合宿後には改善の必要な点なども盛り込んだ活動記録も共有し、翌年の授業計画に役立てられるようにしている。次回の合宿開催中には、教師勉強会も開催したいという声が上がっており、実現すれば益々教師研修としての意義が深まることが期待される。

3-2. 日本語授業の概要

表3と表4は、過去2年間の合宿の日本語授業の時間割である。基本的にゲームやクイズの形式を利用したり、体を動かす、実際にやってみるといった活動型の授業を実施している。また、両年とも、日系企業の社員や研究のためにポーランドに滞在中のドラマセラピストといった特別講師に依頼し、日本語教師にはできない内容の授業を提供してもらった。その他、日本人留学生にも同世代の学生たちが興味を持つ内容の授業をしてもらったり、博士課程や修士課程に在籍中の先輩の中には、すでに語学学校で日本語教育に携わっている者もいるため、そのような学生たちにもユニークな授業をしてもらっている。

表3 2011年 合宿日本語授業時間割

表中の(○名)はスタッフの人数

	1年(32名)	2年(33名)	3年(16名)	修士(20名)
12日	アイスブレイキング (5名) インタビュゲームをしながら互いに知り合う	アイスブレイキング (3名) 様々な日本語を使うゲームをしながら互いに知り合う	アイスブレイキング (3名) 与えられたトピック(共通の話題、ジレンマを呼ぶ話題)について話し合いながら互いに知り合う	アイスブレイキング (4名) 様々なドラマワークで互いに知り合う活動の後、即興ロールプレイ
13日 午前	物語の輪読 (5名) 「こぶとりじいさん」前半:ビデオの観取取りタスク 後半:分節された物語を並べ替え完成させる	物語(日本語の視点) (4名) スタッフによる寸劇を見て主人公を決め、物語の視点とその視点で語文型を意識して物語を作ることで、日本語の特徴を理解する。	歌を題材にしたディスカッション (4名) いきものがかりの「YELL」、ゆず「桜木町」を聞き、別れの表現「さよなら」が表すものについて話し合う。	物語: 原子力発電所- 異国から帰る (5名) 海が原(①被災者②原発関係者)と存続派(③電力会社④政府と党)に分かれてディベート
13日 午後	日本人と動物のマナー (8名) 3択問題になっているスタッフの寸劇を見ながら回答、実際に練習	オノマトペ (4名) 日本語のオノマトペを感覚で捉える。日語しを音で聞く/物に触るクイズ、カルタ、アニメソング	留学生による授業 (4名) SMAP「世界に一つだけの花」鑑賞 国民的キャラクター、ドラえもんについて紹介、ドラえもん新グッズの考案、発表会	今を生きる- 歌やテレビ番組から見る日本の日常 (3名) 講師が違和感を感じたポーランドのビジネス場面から、ボジの確い話し合い 「なぜなぜ3回」の改善法を日常生活の問題で考えてみる
14日	ラジオ体操(室内)・盆踊り(屋外) (8名) 日本文化体験、日本人との話題共有をテーマに、ラジオ体操について知り、日本人教師たちへのインタビューを聞いた後、実際にやってみる。盆踊りはイベント等で学生たちが各地で日本の伝統文化紹介の際、題材となることも目的とし、「東京音楽」、「炭坑節」を踊る。		川柳 (3名) 川柳について学ぶ合宿について話す合宿をテーマに川柳を詠む/発表と鑑賞作品の提示 ↓ 盆踊りに合流	ポロ学生による授業 (4名) 日本のテレビCM紹介/CMクイズ/ポロテレビCM比較話し合い ↓ 盆踊りに合流

表4 2012年 合宿日本語授業時間割

表中の(○名)はスタッフの人数

	1年(65名)	2年(57名)	3年(23名)	修士(28名)
18日 10:00 ~ 11:30	アイスブレイキング (4名) 漢字ゲーム: 部首からたくさん漢字を書きしりとり/動物の鳴き声当てゲーム	アイスブレイキング (2名) 様々なドラマワークで互いに知り合う活動の後、グループで与えられた人物になり物語を作る活動	アイスブレイキング (4名) 大綱読み、伝言ゲーム、山手麻呂ゲームやポーランドのゲームを通じて、他校の参加者と仲良くなる	アイスブレイキング (2名) DVD「ラーメンズ」『TEXT』50ansを参考にあいさつ作文を作り発表する
18日 16:00 ~ 17:30	物語 (3名) 物語の基本的な筆の使い方 課題 「月」 着付け (4名)	物語で学ぶフランス語の日本語 (3名) 相模ビデオ観戦/歴史と現状/星取表・しご名の漢字/決まり手で複合難詞/決まり手当てゲーム	先陣による授業 知識小島の探検 (3名) 江崎香穂「さくらんぼパイ」の読解と日本社会の問題についての討論/ポーランドとの比較	演歌で日本人の心を知る (2名) 演歌特有の表現・言葉・音韻・衣装・歌唱法を探しながら聞く/歌う/話し合う
19日 10:00 ~ 11:30	日本人と動物のマナー (5名) 3択問題になっているスタッフの寸劇を見ながら回答、実際に練習	物語 (2名) 物語の基本的な筆の使い方 課題 着付け (2名)	ジェスチャーで覚える慣用句クイズ (2名) グループ対抗のジェスチャークイズで、身体で表現して慣用句を理解し記憶する	担当講師による授業 ロールプレイ (3名) 架空の国の代表として詳細に設定された役を演じながら問題を解決する
19日 16:00 ~ 17:30	留学生による授業 オノマトペを使ってカルタを作る (3名) オノマトペクイズ/オノマトペカルタの読み札作り/カルタで遊ぶ	先陣による授業 異国から (3名) 関西弁の紹介/観音/関ジャニ「osakaおぼちゃんROCK」	留学生による授業 日本語読解 (3名) 日本の若者の恋愛観に関する講義/与えられた状況と台詞を使ってシミュレーション	物語 (3名) 物語の基本的な筆の使い方 課題「水・道」
20日 10:00 ~ 11:30	物語 (4名) 「はなごかじいさん」前半:分節された物語を並べ替え完成させる後半:ビデオ鑑賞	読者の視点から見た物語 (3名) 主人公の視点から見た物語を作りながら、日本語特有の話し方を理解する。	物語 (2名) 物語の基本的な筆の使い方 課題「木・林・森」	話題- マイナスセブリスに覚える表現 (6名) 日歌の歌話の読み比較/エンタリーシートを書いてみる/自分の短所を肯定的に伝える術
20日 16:00 ~ 17:30	盆踊り事前指導 (6名)	盆踊り事前指導 (5名) 事前指導は3カ所に渡り、室内で・盆踊りの説明・原曲と東京音源の説明・盆踊りの動きを総括して指導	盆踊り事前指導 (8名) 盆踊り(外に出て全体で) 屋外では2重の円を作り、参加者全員で踊る	

4. アンケート回答とその分析

日本語授業に関しては毎年学生に対し、授業に対する満足度や今後の授業への要望、提案等を把握する目的でアンケート調査を実施している。アンケート用紙は各レベル毎に、各授業について完全に自由記述させるものである。実施方法は1コマ目の授業で担当教師から出席者全員に配布し、すべての授業が終わるまで各自が保持し、都合のいい時間に記入してもらい、合宿終了時に提出してもらうものである。

4-1. アンケート回収率と考察

全体の回収率は2011年は55パーセント、2012年は49パーセントだった。アンケートを実施してみると、まず修士課程の回収率が極端に低いことがわかった。具体的には学士課程の回収率が両年とも平均約60パーセントであったのに対し、修士課程の回収率は2011年は40パーセント、2012年は21パーセントであった。回収率が低いことはそもそも修士課程の学生の合宿中の日本授業に対して期待

感が薄いことや授業への需要の低さを示していることも考えられる。

また、アンケートの提出率には大学により大きな差があり、両年とも同じような結果になっていることがわかった。具体的な数値は合宿の主な参加者を占める国内の国立大学についてのみ記述するが、アダム・ミツケヴィチ大学の両年の平均提出率が 60 パーセント、ニコラウス・コペルニクス大学が 80 パーセント、ヤギェロン大学が 38 パーセント、2012 年に初参加したワルシャワ大学が 15 パーセントだった。ここから考察されることは、まず、新しく参加することになったワルシャワ大学の参加者とは、合宿の目的を共有できていないのではないかとということである。しかし、ワルシャワ大学に限らず、4 回の合宿を経て、大学間、および学年間における意識の差異も開いて来ていることが反映されている可能性も否めない。とにかく大学毎の雰囲気の違いが確実に見て取れるという印象を受けており、コーディネートを担当する立場として参考になった。

4-2. アンケートによる評価と授業の内容的分類

次に、アンケートに見られる授業に対する評価と授業内容の関連性について見ていくことにする。まず、好評を得ている授業に注目すると、日本文化に関係する内容は軒並みそれに当たることがわかった。これには、文化に対する知識を高めながらも日本語の授業と位置づけるのに支障のないものと、完全に日本文化の体験的な授業がある。継いで評価の高い授業は、普通の授業ではまとめて扱われることのない日本語の要素に関する内容の授業だった。一方、日本語をツールに意見を交換する内容の授業に対する評価は低く、学生の満足度が低いことが伺えた。以上を評価の高い順に例を挙げてまとめると次のようになる。

- ① 日本文化の体験（盆踊り、ラジオ体操、書道、着付けなど）
- ② 日本文化の知識（日本のマナー、川柳、演歌、相撲など）
- ③ 普通の授業で学びにくい日本語の要素（日本語らしい話し方の視点、オノマトペ、慣用句、方言など）
- ④ 日本語をコミュニケーションツールにした活動（ディスカッション、ディベート、発表など）

5. 学生の立場から考える合宿における授業の意義

合宿の日本語授業として、教師陣はこれまでも意義があると判断した内容の授業を提供してきたわけであるが、その判断を支える軸として、大切だが普通の授業では扱いにくく、むしろ合宿の活動型、体験型授業に向いているということがある。先述の分類の②と③は、学生にも教師にもバランスよくその意義が認められていると言える。それに対して 3 年生や修士課程の学生を対象にした討論や意見交換の授業（④）は、「レベルが高すぎる、内容に興味を持ってない、よく知らない人の前で意見を言うのが難しい」などの回答が多かった。これは教師たちの中に、合宿の授業とはいえ、高学年の学生には高学年らしいことをさせたいという思いがあるからであるが、学生の立場からすると、知り合ったばかりの参加者が集う授業で扱う内容としては相応しくないと考えられてしまうようである。

また、多種多様な授業の中で学生からの評価が最も高いものは日本語とは直接関係のない文化体験（①）で、特に盆踊りと書道は絶賛を得ている。盆踊りについては「盆踊りは合宿になくてはならないものです。山の風景を見ながら 200 人で踊るのは言葉で表せない気持ちでした。」や「最高！大好き！来年も踊りましょう！友だちに教えたい。合宿の伝統になる。合宿の理想的な終わり方だ。」など数多くの肯定的な意見が寄せられた。実際に学生たちは合宿終了後も各大学のイベントで盆踊りを

披露するなど、ポーランドの日本学専攻の学生たちの間ではすっかり定着している。「日本語授業」と銘打っている以上、果たしてこれでいいものかと考えてしまうが、伝統文化への興味が日本語学習の動機にもなっているヨーロッパの学生は、このような学びこそ、大学の授業では得られないものとして合宿に求めているようだ。これが日本学を追求する学生たちの動機を高めるのに役立つのであれば、やはり「3-1. 教師の立場から考える合宿における日本語授業の意義」の「3）刺激を受け、学習動機を高めて大学に戻る」という目標にも合致すると考えて良いだろう。

6. まとめ

以上、コーディネートに携わった過去二年の国際日本学学生ワークショップの日本語授業についてまとめ、学生によるアンケートの回答をもとに、授業の意義を問い直す作業を行ってみた。来年以降も過去の合宿から必要な授業は残し、新しい内容については学生の希望を聞き入れながら企画していくことになるだろう。その際、出席率やアンケート回収率からも需要や期待の低さが見て取れる修士課程の授業については、そもそもその必要性から見直す必要があるのかもしれない。

また、学生にとって意義が認めにくく、評価の低かった、日本語をコミュニケーションツールにした討論や意見交換の授業について、現在我々が考えていることとしては、このような枠の授業を完全に学生主体の授業にしてしまう方法である。例えば学生自身が日本人の意見を聞いてみたいと思っような日本社会の問題について、ボランティアの日本人留学生を総動員してディスカッションをするような授業でも良いだろう。その中で教師がどんな役割で参加するのか、または全く参加しないのか、それも学生たちが決めれば、教師が決めた枠に捕われず、学生自身にとって意義深い授業に改善されることも十分期待できる。または、他の地域で行われた日本語合宿の取り組みも参考になる。2012年6月に行われたバルカン半島日本語サマーキャンプでは、他国や他大学の学生とグループになり、グループ紹介のビデオ制作をしている。合宿中に出来上がった作品はブログ²で公開されているが、成果物が残る活動は達成感も大きく、制作過程では日本語をコミュニケーションツールに親睦も深まる。

そして、言うまでもなく、学生同士が日本語をコミュニケーションツールに交流する環境を作り出す最良の方法は、国外から多くの学生に参加してもらうことだろう。費用もかかり、自分の大学を欠席して参加することになるため、在籍機関の理解と協力も必要不可欠だが、国際合宿としての価値もより高まり、国内から参加する学生も刺激を受け、非常に有り難い学びの機会を得られるに違いない。

参考文献

瓜生佳代、アレキサンドラ・シュチェフラ、スタニスワフ・マイヤー、アンナ・チャスカ（2010）「ポーランド、スロバキア、チェコの日本学科合同合宿の試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第6号、157-163
Japancamp トップページ<<http://www.japancamp.hu/index.php?lang=jp>>
バルカン半島日本語サマーキャンプ<<http://yaki.holy.jp/blog/>>

2 バルカン半島日本語サマーキャンプのウェブサイト (<http://yaki.holy.jp/blog/>)